

「東日本大震災から六年」 「風化させない・忘れない」 シンポジウムを開催

東日本大震災から六年が経過するなか、国土交通省東北地方整備局、日建連東北支部（竹浪浩支部長）などで構成する「風化させない・忘れない」シンポジウム実行委員会は二月十八日、東京・港区の日本消防会館で「東日本大震災から六年」『風化させない・忘れない』シンポジウムを開催した。

開会にあたり主催者を代表して国土交通省の川瀧弘之東北地方整備局長が、東北地方整備局が所有している震災当時の映像を映しながら発災後の初動対応を振り返り、被災直後の啓開、地域支援、復旧の状況、現在までの道路、河川、港湾、まちづくりなどの復興の状況を報告した。続いて、今村文彦東北大学災害科学国際研究所所長による基調講演「東日本大震災での教訓を繋ぐ 忘却とのたたかい」が行われた。講

演の中で今村所長からは、東日本大震災で得た経験を今後の防災教育に活かすべきという話があった。

今村所長の講演の後、「東日本大震災を教訓とした防災・減災」をテーマとしたパネルディスカッションが行われた。コーディネーターは涌井史郎東京都立大学特別教授が務め、パネラーには、被災地から村井嘉浩宮城県知事と戸羽太岩手県陸前高田市市長、南海トラフ地震対策に取り組み高知県の尾崎正直知事、防災教育の第一人者である片田敏孝群馬大学広域首都圏防災研究センター長、タレントの春香クリスティーさんが登壇。また、アドバイザーとして森昌文国土交通省技監が参加した。

はじめに村井宮城県知事は、「同じ災害がきても命だけは守る、守られるまちづくり、物流

拠点などの重要施設は徹底的に守るということも重要な教訓。広域防災拠点など創造的な復興を進める」と震災を経験して得た教訓を披露した。

次いで戸羽陸前高田市市長は今年が東日本大震災から六年が経過することを踏まえて、「大震災が忘れられるのは、自分のこととして考えていないから。自分の命は自分で守るしかない」という意識を共有してほしい」と本シンポジウム

開催の趣旨を強調した。

続いて近い将来、南海トラフ地震の発生が懸念される高知県の尾崎知事は、「震災対策は膨大で一つのシナリオにとられすぎてもいけない。県は市町村をバックアップしリードするが、我々の知見だけでは足りない。国が県をリードしてほしい」と国に対する要望を述べた。

群馬大学の片田センター長は、今村所長の講演を受けて防災教育の視点から「何よりも逃げる意思を持つことが重要。被災体験に学び、災害に対する教訓が文化として定着するようにしていかなければならない」と述べた。

タレントの春香クリスティーさんは、「このくらいなら大丈夫、という慣れが怖い。二〇二〇年の東京オリンピック・パラリンピックなど、多くの外国人が訪れている際に地震が発生した場合どうするかを考えておくべき」と国際的な視点から問題提起した。

パネラーの議論に耳を傾けていた森技監は、「大震災のときは道路だけでなく海、鉄路、飛行機をフル活用して物資を運んだ。これからもネットワーク整備にしっかり対応していきたい」と述べた。

最後に涌井特別教授はパネラーから出た意見を総括した後、「土木的な対応に加え、生態系や自然を活用しながら、防災、減災、そして災害を克服し次世代につなげる『克災』に取り組むことが重要」と締めくくった。



会場の様子



パネルディスカッション

会場では、実行委員会構成団体の震災後の取組みを紹介したパネル展も同時開催した。

本シンポジウムは土曜日に実施したにもかかわらず、約七〇〇名の参加者で会場がほぼ満員となり、東日本大震災の教訓を首都圏をはじめ全国に発信することができた。実行委員会ではこれからも東日本大震災を「風化させない・忘れない」取組みを全国で展開していきたいとしている。

「風化させない・忘れない」シンポジウム実行委員会は、東日本大震災から6年、これまで被災各地の復旧・復興は着実に進展している一方、大震災の記憶は急速に風化しつつあることから、大震災の経験と教訓を風化させず、忘れることなく、首都直下地震や南海トラフ巨大地震など今後全国各地で想定される災害にどう活かしていくかを考えることを目的に組織されたものである。

構成団体

国土交通省（東北地方整備局外東北各機関）、日本建設業連合会東北支部、土木学会東北支部、東北建設業協会連合会、建設コンサルタンツ協会東北支部、東北測量協会、東北地域づくり協会